

一番茶句会報

2018 平成三十年
三月 月号
(590)

俳句の特殊性について

磯田なつえ

沢木欣一先生は「俳句の基本」のなかで「俳句は文学のなかでかなり特殊な性質を持ったものであるから、その特性を知っていないと、長い間作っていてもなかなかよいレベルに達しない。中略」
「そういう人はたいいてい基礎がおろそかになっている。」と書かれ、基本は定型詩であり、季語が生きて働いていなければならず、句作の態度、方法は写生が重要といわれ、昨年九月号で中村たかさんが触れられました。

私は長い間俳句の特性とは？がつかめないうえに、ある時、これかな？と思いついた文に出会いました。それは「俳句・四合目からの出発」阿部篤人著・講談社学術文庫の第三節でした。

凝縮性こそが、俳句がいつさいの他の文芸形式と根本から異なる点である。散文はもちろんのこと、各種の詩や短い詩、一行詩などでも、その文章は、目が移動するにつれて読み進む形、いわば、時間と共に進行する「進行形式」、時間と共に流れる「流動形式」であります。ところが俳句だけは、全体を「一ぺんに読みとつてしまふ形、時間の進行・流動をびたり拒否した形であります。時間を超越することによって、一点に凝集する形をとります（以下略）。我々の意識としては四、五秒が「現在」であり、現在直下で全体をとらえる高度の緊張が俳句の凝縮力であります。

以下大幅に省略しますが、俳句の五七五の中における言葉のあり方について、著者は次のように述べています。

○俳句の中の各々の言葉は掛け算であって、加え算ではない。
言葉×言葉×言葉 になつて加え算以上の効果を發揮する。
五七五の合計は十七字に過ぎないが、掛け算すれば百七十五、

更に一語一語の充実した内容を掛け合わせればその何十倍にもなる。しかし、もし一部分にでも欠陥（マイナス）があったならば、少しの傷でも大きく目立つことになる。

○省略の極限 俳句は煎じ詰めたぎりぎりの表現だから無駄や冗冗しさがあつてはならない

総ての物事を取り上げるときは、それが「作者の眼前に存在している立場」であるから、見た・眺めたは一切無駄になる。

雨が降る・風が吹く・日が照る・月が輝くなどの物を指示する以外の姿を表す動詞は無駄である。

○事物直指の立場 作者が事物を指示すれば、違った時と場所にいる読者であっても、その通りに目に浮かべてくれる。作者は物を指さすだけでよい、他の事柄をしゃべる必要はない。

初心者は物を取り上げると、そのものの姿をどうだった・こうだったとしきりに「説明」したがりです。

まだまだ先がありますが、また機会があれば触れてみたいと思います。私はこの文に出合つて、様々な場所で断片的に得てきた数々の基本的なこと 俳句は眼前、写生、切字、引き算、寡黙、断定、一人称、物を詠む、説明や理屈は要らない、動詞は最小限、季語の力を信頼せよ等々が、一本の糸で繋がつたように思つたのでした。

・私の好きな句 一月号より

西川満寿美

餅花やコーヒー香るカウンター	松永 和子
色褪せし夫の写真や年流る	辻 桂子
澄み渡るまんまるの月去年今年	新川 晴美
初髪をきりりと結ひて厨房へ	渡辺 公美
花枇杷や富士を離れぬ雲一つ	磯田なつえ

もちの実句会

No. 553

H
・30
・3
・17

磯田 秀治

早桜トーマス号へレンズ向く
SLのフェスタの客や春半ば
木の芽風銘茶産地の道の駅

伊坂 壽子

ナフタリン匂ふ広間の飾り雛
足生へし蛙子を鷺呑み込めり
ビル街を吹き抜くる風沈丁花

花村すま子

気球より届くメールやうららなり
鶏糞の馴染みし土へ薯植うる
陽光や拳ほなる葱坊主

山本 法子

暮れ泥む富士へ白蓮咲き満つる
スニーカー手に持ち少女青き踏む
早咲きの桜散りしく川堤

磯田なつえ

塵出しの夫買ひ来たり分葱束
杉花粉山の学校烟らする
SLの煙呑み込む春の山

由本法子報

瀬名笹百合句会

No. 420

H
・30
・3
・19

大石ひさを

春の朝曾孫拳式の知らせ来る
春立つや女の帽子も赤と白
カラオケを終へて家路に春の月
蒼天や石累果と雪崩跡

漆畑 一枝

長閑けさや声のやさしき能登訛
春田打つ生徒ら息を弾ませて

家康の像春光の中に立つ
春昼の城址に遊ぶ鳩の群

大森 弘子

鳩群れて飛び交ふ城址春うらら
梅東風や老若男女縁日に

前田 一三

畑打ちの老婆の姉さかぶりかな
料亭の琴の音ゆかし浅き春

片井 克子

厚着する癖そのままに浅き春
近づきし気配に零る雪柳

竹鉄砲玉に八ツ手の花を込め
友の手の餌に飛び来る春の鳥

松本 恵子

菜の花の土手つややかに夕日中
家郷なほ汚染の続く浅き春

松本恵子報

安西句会

No. 343

H
・30
・3
・4

吉田 明美

料趙や野辺の送りの空真青
草萌ゆる畦のでこぼこ踏みゆけり
きこきこと自転車をこぎ春浅し

菊山 静枝

花辛夷動きそめたる四方の山
御手洗の底の青空鳥帰る
童顔の僧の説法名草の芽

佐藤 博子

沈丁の一枝挿せり牛乳壺
強霜に葉のすきとほる小径かな
日溜りに蓬芽を出すうすみどり

立川まさ子

浅春の城址にひびくケーナかな
カリヨンに母子口ずさむ春夕
早春の湯立の雫受けにけり

にこやかに退院告ぐる春の昼
夫の忌や遺愛の椿咲き満つる
病床に紙ひひな折る媪かな
神苑によるづの絵馬や梅匂ふ
梅三分主税自刃の血染石
大寺の鈴の緒ゆらす涅槃西風
冬満月うさぎの影の耳ピンと
赤ん坊の髪ふんはりと花菜風
ゆつくりと二両電車つくしんぼ
登呂の田をめぐる小流れ水温む
白砂利で曲水模せり梅の苑
巻紙の札状受くる梅日和

はとり句会

No. 322

H・30・3・9

街裏に千年の樟涅槃西風
生垣に張り付くバケツ春疾風
書き直す自分の齡木瓜の花
入院の小さき手鏡春浅し
あかときのまろき春月病窓に
ひひなの日五目ごはんの患者食
一万のランナーの背に春陽射す
出席と書く案内状さくら草
春めくや昼のスープに振るパセリ
鉄骨の置場に数多つくしんぼ
ふきのたう揚げて友よりお裾分け
桃の日や俳句の友の訪ねくる

辻 桂子

橋本 紀子

松永 和子

坂本 操子

佐藤博子報

谷津 政子

藤田 幸子

多々良和世

新川 晴美

石堀の裾の隙間に犬ふぐり
うららかや双子を乗せて乳母車
我が庭に丈の短き黄水仙
きびきびと湯立神事や風光る
検査終ふ待合室の余寒かな
退院の夫へひひなのちらし鮎
故里の訛りで報す磯開
春風やスキップで来る下校の子
葦原へ分岐いくすぢ春の川
杉花粉吐いて奥山動き出す
撫牛の背に散り掛る梅真白
啓蟄や絵画展への案内状
公園の水車の湿り木瓜の花

樟ヶ谷句会

No. 151

H・30・3・15

ピアノの音赤子泣きやむ春の昼
人見知り始むる赤子雛の宴
雉鳩の亡きから軽し花の下
戯るる犬と若者土手青む
春荒や庇取られし爺笑ふ
轉の葉陰に振れる尾羽かな
味噌語る老舗の若手春めけり
春の雷診察直ぐに終りけり
雛調度手に乗るほどの将棋盤
百冊の図書置く駅や杉の花
紙ひひな白壁の歯科治療室

大村 泰子

神尾 知代

山本 法子

磯田なつえ

花村富美子

磯田なつえ報

斎藤真理子

土本かず子

下河辺美乃里

磯田 秀治

初蝶や山の駅舎に誰もみず
山のカフェ硝子コップに花菫
姫辛夷小さき旅を話し合ふ
故郷の日差に立てり麦青む
春富士や夫婦押しくる乳母車

磯田なつえ

中村 たか

不河辺美乃里報

番町句会

No. 57

H・30・3・16

春の夜や旅案内に丸印

前田 恭子

うららかや花の形の帯結び

婆と子の手つなぎ散歩柳の芽

お向ひの喇叭水仙咲き揃ふ

紅梅や空き家となりし庭の隅

彼岸会の案内状の届きけり

春夕焼手繋ぎの子と土手帰る

夕風に広がり散るや梅の花

艾屋の長き講釈春の昼

伸びらかな乙女の像や花辛夷

白壁の櫓きらきら春日差

境内に七羽のあひるうららけし

春の山鳶に追はるる鴉かな

近づけど若葉食む鹿逃げもせず

花ミモザ夫と日課の散歩道

春風や火元にぼつり白き花

薔薇の芽や快方の師の背筋伸ぶ

露味噌の苦味が咽に出勤す

SLを待つカメラマン花の下

父の背に仰け反る幼花の下

榎戸万里子

佐藤 ハル

八木 洋子

池村 明子

関根 幸子

前田 恭子

かんがるー句会

No. 115

H・30・3・8

目の合ひて寄り来る牛や草青む

西川満寿美

独りきり登る百段冨返る

羨道に数多のすみれ古墳山

受験子の机の横に眠る猫

渡辺 公美

斑雪学生たちの旅鞆

春昼や低くゆさぶるヴァイオリン

リズムよく捏ねるパン生地春近し

穏やかな春日浴びをり貝ボタン

店先の五輪の話日脚伸ぶ

葱坊主猫の額の貸ばたけ

春風やベンチに食ぶるカップ麺

春めくや句の推敲を茶房にて

サンタリアアひと口春の顔合はせ

白き手に煌めく指輪春隣

オリーブの古樹に願掛け春日和

青空へ顔を出したり雪椿

雨水かな河口に立ちて弓を引く

咲き誇る花には花の心あり

陽炎の中一族の墓所

啓蟄の野へ新しき句帳手に

※勝又寛樹さん新入会・勝見秀雄さん退会

小林智子報

おめでとう 第十五回 富士山を詠む 俳句賞入選
佐野鬼人選 特選句

黒黒と富士晴るる日や鷹渡る

磯田なつえ

レモン俳句教室 No. 36

H・30・3・13

組板に菜つばシヤキシヤキ春近し

松永 和子

田の隅の泥揺さぶれり蝌蚪の群

池村 明子

這ひ這ひの子へ手拍子や桃の花

西川満寿美

手みやげの和菓子に添ふる梅の枝

前田 恭子

啓蟄や鉢の下よりダンゴムシ

八木 洋子

白木蓮抱へし女交差点

齊藤真理子

露の臺天麩羅にして香の増せり

榎戸万里子

春疾風小枝啣ふる鴉かな

磯田なつえ

春の旅独り居の友動き出す

山の子の三角花壇葱坊主

鳥浴ぶる池のきらめき春日差

つくしんぼ駅にSL写真展

春寒やゲートボールの音にぶし

石堀の影の庭隅つくしんぼ

診察へ母のスカート風光る

焼け跡のヒソヒソ話春寒し

山の子の三角花壇葱坊主

つくしんぼ駅にSL写真展

◇兼題 春近し 蝌蚪 土筆 で作句。自選カレックスン (俳句) H30・2

月号 俳句における語順をを読む

前田恭子報

向日葵句会 No. 30 H・30・3・14

春風やテニスコートに弾む声

多々良和世

川地蔵供花たつぷりと水温む

立川まさ子

堅穴の住居の裾の犬ふぐり

牙返る急階段の銚介居

緋寒桜開花数ふる園児たち

土本かず子

杓子庵親指ほどの露の臺

橋本 紀子

からくりの獅子吐くみくじうらけし

築山の風やはらぎて梅開く

高層の掃除ゴンドラ風光る

佐藤 博子

木の芽どき一年鯉に模様浮く

古民家の狭き土蔵や吊し雛

整然と木彫りの羅漢春灯し

白子買ふ一合枘にてんこ盛

白子買ふ一合枘にてんこ盛

吊り上げて家組立てり梅日和

下河辺美乃里

坂本 操子

佐藤博子報

静岡同人句会 No. 86

H・30・3・3

コトリとも動かぬ水車春疾風

富美子

進路決めドラム打つ子や二月尽

法子

二ヶ月の風強き日や兜太逝く

操子

父亡くて八十年や霾れり

たか

遅き日の長き我が影散歩道

恵子

平らかに光をたたみ春の波

なつえ

山本法子報

山本法子報

新句会 静岡句会 発足 栗田やすし顧問ご指導

☆日 時 五月一日 (火) 午後六時十五分 以後毎月第一火曜日

☆場 所 番町市民活動センター小会議室

☆ご指導 栗田やすし顧問

☆投 句 三句 (短冊) 当日六時半までに投句完了のこと

☆清記・選句・披講は普段の句会通り

☆持ち物 赤、黒鉛筆、ボールペン、参加費若干

☆幹事・世話人 山本法子 花村富美子

引越し

坂本 操子

昨年秋、突然孫夫婦が「一緒に住みたい」と言い出し築三十年の家を壊すことになった。それからは家財の整理に明け暮れた。終活には丁度良い機会だった。

我が家に三匹の拾った猫がいる。借家探しには不利な条件である。ペット可でも犬は良いが猫は駄目など。やっと築四十七年の二戸建が見付かった。八畳と十畳の洋間、和室が三部屋ある。窓はサッシ、内装は新しいが戸や襖に隙間がある。寒中の転居に閉口した。猫もストレスがたまって炬燵に潜ってばかりいた。

三月一日の朝、物置のトタン屋根を打つドラム缶を叩く様な雨音を目を覚ました。気温は十三度、少し汗ばんでいた。この味わいのある暮しに馴染んでこれからの四ヶ月を楽しもうと思う。

燈火親し間取あれこれ設計図

初曆先づ地祭の日を印す

建前に花まる記す初曆

寒暁に結ふ引越しの塩むすび

引越しの荷をきびきびと寒の汗

梅薫る幸町に転居せり

底冷や床板軋む仮住まひ

取り壊す家にも撒けり追難豆

仮住みに少しなじみて寒明くる

仮住みの十窓に春来たりけり

明日壊す家に二月の眉の月

冴返る更地となりし家の跡

引越しの荷に埋れ住む節の忌

春日さす家の跡地に佇めり

啓蟄の地へ三鍬入れ地鎮祭

仮住みに為すことも無き日永かな

「自選力を高めるために」—動詞の活用について②—

① 前回につづいて今回は上二段活用の動詞です。

例 伸ぶるだけ伸ぶるあごひげ風邪籠 真理子 (名詞 助詞 動詞)

動詞「伸ぶる」は口語では「伸びる」で広辞苑は「伸びる」で引きます。

の・びる(伸びる)『自上一』、文の・ぶ(上二)とあります。

例「伸ぶ」という動詞は

伸び(イ)ず (伸び+ず=打消しの助動詞) …未然形

伸び(イ)て (伸び+「て」「たり」用言に続く) …連用形

伸ぶ(ウ) (文の終り) …終止形

伸ぶ(ウ)る (伸ぶる+時=体言や「なり」等に続く) …連体形

伸ぶ(ウ)れども (伸ぶれ+ども=助詞) …已然形

伸び(イ)よ (命令する) …命令形

※「伸」は語幹といって変わらない部分、太字の部分は語尾で変化する部分です。

び・び・ぶ・ぶ・びとび(イ音)と**ぶ**(ウ音)で活用しています。イ音とウ音

で活用する動詞を上二段活用といいます。

② 辞書を引くのが一番ですが、見分け方を覚えると、いちいち引く手間が省けます。それは打消しの助動詞「ず」をつけてみる方法です。その活用語尾が

ア段なら4段活用です。(例 行**か**ず、取**ら**ず、話**さ**ず、咲**か**ず、踏**ま**ず…どれもア音)

イ段なら上二段活用です。(例 起**き**ず、過**ぎ**ず、落**ち**ず、恥**ぢ**ず、詫**び**ず…どれもイ音)

エ段なら下2段活用です。(※下二段活用は来月触れる予定です)

「一番茶」作品鑑賞 (月号) 中村 たか

本日で終るリハビリ冬木の芽

山本 法子

足を怪我されて長いことリハビリに通われた。そのリハビリも今日で終る。弾む様な句調にその心が伝わって来ます。季語の「冬木の芽」が気持を表してぴったりです。

俎始エプロンの紐きゆつと締む

松永 和子

俎始は 新年になって始めて俎を使い、包丁を使って料理することとあります。気分も新しく台所に立った主婦の、張り切った感じが、きゆつと」と云う言葉に表現されていると思いますが、口語的なので「固く結ぶ」位にしたらどうかと思いました。

初詣看取帰りの普段着で

神尾 知代

神尾さんは御主人の御病気で苦勞なさいました。年末の忙がしい時も病院通い。正月もいつもの様にお世話をし、その足で初詣に廻られた。坦坦とした詠みぶりに懸命な様子が伺われます。

どこからも誰も出て来ぬ寒さかな

磯田なつえ

この句を見てえっと思った。普通に考えると、訪ねた家が留守だったと云う事かと思ったが、「寒さかな」は尋常でない。福島原発事故で人の居ない家並か、などいろいろ想像させられる。面白い句と思いました。

真つ新なスケートリンク蹴り出せり

西川満寿美

開場したばかりの広いリンクは真新な氷が張りつめてある。スケート靴をはいてわくわくしながら氷上に立つ「蹴り出せり」で場面が動き出した。簡潔にその場の写生をして、さわやかな一句。

☆・☆・☆・あ と が き・☆・☆・☆

各地から桜の便りも聞かれ、お花見の予定をされている方もいらっしゃるでしょう。春を満喫して作句に励んでください。四月の総会及び吟行句会、五月からの栗田やすし先生の勉強会、七月の合同鍛錬会など、計画が進められています。趣旨をご理解下さり、皆様のご参加をお願いいたします。気温差、花粉症と季節の変わり目です。気を付けてお過ごしください。

和世

平成30年「一番茶」句会一覧

句 会 名	開催週	開催場所	開催時間
もちの実	第3土曜	杓子庵(新聞)	13時
瀬名笹百合	第3月曜	瀬名中央町会館	13時30分
安西	第1日曜	番町市民活動センター	13時30分
はとり	第2金曜	花村富美子宅(羽鳥)	13時
樟ヶ谷	第4木曜	杓子庵(新聞)	13時
かんがるー	第2木曜	杓子庵(新聞)	13時30分
番町	第3金曜	番町市民活動センター	18時30分
静岡岡	第1火曜	番町市民活動センター	18時15分
向日葵	第2水曜	番町市民活動センター	13時30分
レモン俳句教室	第2火曜	番町市民活動センター	9時
同人	第1土曜	杓子庵(新聞)	13時

一番茶句会報 3月号(590)

平成30年3月31日 発行

発行責任者 磯田なつえ (☎054-278-7443)

〒421-1201 静岡市葵区新聞458

編集部 山本 法子(部長) 中村たか(校正)

操子・美乃里・博子・明子・和世

印刷 番町市民活動センターにて印刷